【論　文　提　出　者】　社会文化科学教育部　　文化学専攻　日本・東アジア文化学領域
氏名　李 天然
【論　　文　　題　　目】　佐藤春夫と中国近代文学

【授与する学位の種類】　博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、近代日本文学史において多彩な活躍をした詩人、小説家、佐藤春夫（1892-1964）と中国との関わりについて、中国の作家との交友、作品の相互翻訳と紹介、中国近代文学に及ぼす影響、中国古典文学への眼差しという四つの観点から、検討を加えた論考である。

本論文全体は、序論、第一部（全二章）、第二部（全二章）、第三部（全二章）、結論、付論（全二章）から構成される。序論では本論の方向性が示される。すなわち、中国の作家たちとの交友の始まりと決裂の間の 1927 年の江南旅行に注目し、交友関係の連続性や佐藤春夫の中国観の形成を考察する。次に、佐藤春夫の作品が中国で翻訳された概況を把握し、佐藤春夫による蘇曼殊の紹介に照明を当てる。さらに『田園の憂鬱』など佐藤春夫の作品が中国近代文学に与えた刺激を検証し、最後に中国古典文学の視点からその初期作品や中国観を逆照射する。

本論文第一部は、1927 年の江南旅行に焦点をしぼり、佐藤春夫と郁達夫、田漢との交遊を跡付けながら、その作品を読解する。第一章では「西湖の游を憶ふ」と郁達夫「日記九種」との間テクスト性に着目し、前者に描かれる郁達夫には政治に背を向ける隠者の風貌が付与され、才子佳人小説に見られる恋愛の描写がなされることを考察する。第二章では、田漢の案内を受けた南京旅行から生れた「曾遊南京」には作者の疎外される姿が描かれ、「南京雨花台の女」には作者が南京に求める「頽廃の美」と現地への没入が読み取れることを論究する。続く第二部第三章では、1920 年代から 1937 年まで佐藤春夫の作品が翻訳された様相を、三つの時期に分け、中国文化の理解者と目されたことから周作人などにより翻訳されるようになり、その小説には詩情が見出され、左翼の作家を含めて読まれたことを概観する。続く第四章は、蘇曼殊の紹介を通して、その文学に見られるアイデンティティの不安は、佐藤春夫の作品に底流するものでもあることを論じる。本論第三部第五章では創造社の詩人、馮乃超の詩集『紅紗灯』を俎上に載せ、その表現モチーフ、描写、構造に『田園の憂鬱』との類似を検証し、同詩集が『田園の憂鬱』の刺激によって創作されたことを論証する。同第六章では、左翼作家、艾蕪が佐藤春夫と郁達夫の絶交を素材に「友誼」を創作したとし、さらにその『田園的憂鬱』『都市的憂鬱』の二作は、プロレタリア文学の視座から『田園の憂鬱』を読みなおして書かれた可能性を検討する。付論第七章では、聞き書きをもとに制作されたとされる佐藤春夫の初期作品「お絹とその兄弟」は、白話小説「売油郎独占花魁」の枠組みを借用したものであることを究明する。続く第八章は「秦淮画舫納涼記」において、中国古典文学に親しんだゆえに、中国で現実に直面すると懐古的情緒が頓挫し、現実には幻滅を覚える佐藤春夫の中国観を浮き彫りにする。本論文の結論では、中国の現実を認識する難しさが戦時中佐藤春夫の東洋文化観を形成するに至ると指摘し、今後の課題として世界文学の潮流を視野に、佐藤春夫と中国文学の関りを位置づける必要性を展望する。

本論文の示す新知見と独創性は、以下の三点に要約される。第一に、佐藤春夫と中国近代の作家との交流を新たな観点から考察し、中国古典文学への愛好ゆえにバイアスがかかったその中国観を剔出したこと。第二に、日中戦争が勃発するまでの中国における佐藤春夫の作品が翻訳された様相を概観し、その特色をとらえたこと。第三に、『田園の憂鬱』の反響を詩や小説に広く探り、双方の作品について読みを深められたこと。さらに、本論文で言及される多くの作家の個別研究にも多々の点で寄与する。

以上のように、本論文は佐藤春夫と中国文学の関わりをめぐり、日本文学、中国文学、及び比較文学の研究において新たな知見をもたらすものであり、博士（学術）の学位にふさわしいと判断する。

【最終試験の結果の要旨】った。

学位論文申請者は、令和 6 年 1 月 17 日（水）に実施した口頭試問において、博士学位論文の内容に関する審査委員の質疑に対して、適切な応答を行った。

また令和 6 年 1 月 20 日（土）に開催された学位論文発表会において、博士学位論文の主旨に即して発表を行い、出席者からの質疑に対しても適切に応答した。

以上により、当該研究テーマについて博士の学位にふさわしい学力及び関連領域に関して十分な知識を備えていることが確認された。学位論文審査の結果とあわせて、申請者に博士（学術）の学位を授与することができると判断する。

【審査委員会】

主査　西槇 偉

委員　坂元 昌樹

委員　屋敷 信晴

委員　濱田 明